

栗木京子短歌の初期作品考

—— 京都大学在学時の歌の原点とそのゆくえ ——

草木美智子

一、はじめに

現代歌人を代表する一人である栗木京子の特質は「社会詠」といわれている。その「社会詠」が質量ともに頂点に達し、評価を得たのは第五歌集『夏のうしろ』（短歌研究社 平成一五年七月）だが、それ以前の歌集には「社会詠」の存在は薄いと言えよう。特にデビューから結婚までの歌を収めた第一歌集『水惑星』（雁書館 昭和五九年八月）第一部には、「社会詠」の存在はほとんど認められず、大学時代の日々、青春、恋の歌が多いのが特徴である。だが、栗木が二十歳で短歌に出会ってから毎号のように投稿していた短歌結社「コスモス」の会誌『コスモス』、角川『短歌』の初出を調査すると、本歌集には収められていない歌の存在に気づく。それらの歌材は、栗木が青春時代を過ごした京都大学キャンパスの光景、友人たちに関連するものである。栗木は、二十歳のころ、京都大学理学部の講義や実験についていけず挫折を味わい、居場所がなかった。その深い挫折感の中で出会った短歌に救われた、と後に述べている⁽¹⁾。確かに、その当時の歌に目を向けると、現在の栗木短歌の特質である「社会詠」の原形、あるいは萌芽とも言えるものが確認できる。すなわち、自己のこころの奥を丁寧に見つめる視点である。冒頭で、第五歌集『夏のうしろ』

以前は「社会詠」の存在は薄いと述べたが、大学時代の作品にこの視点が認められ、これが、その後の第五歌集『夏のうしろ』の「社会詠」へとつながることが判明した。栗木のこのような視点に関しては、これまで言及した研究は、管見の限りない。

そこで本稿では、栗木短歌の原点（特質）である「自己のこころの奥を丁寧に見つめる視点」を探るべく、初期作品と第五歌集『夏のうしろ』の作品を取り上げる。まず、京都大学在学時の歌を「初期作品」と位置づけた上で、掲載誌から抽出し、それらを丁寧に解釈し分析を行う。さらに分析を通し、後の栗木短歌における「社会詠」、主に第五歌集『夏のうしろ』にどのように継承されるのかについて私見を述べる。尚、本稿に引用する作品に付した傍線はすべて稿者による。

二、挫折から短歌創作へ

栗木は昭和五十年四月、京都大学の中央食堂古書市で偶然、短歌結社誌『コスモス』を購入し、短歌に惹かれ「コスモス」に入会する。昭和五十年『コスモス』六月号ではじめて出詠する。これが次に挙げる栗木のデビュー作である。⁽²⁾

山本京子 京都

理学部の囲ひの向う四、五人の白衣の人らテニスに興ず

物理学ぶ人は優しと我が言へば額つつきて君は笑へり

以上の二首は、本名で出詠し、後に刊行された第一歌集には収められていない。両首に「理学部」「物理」と当時の栗木が学ぶキャンパスの光景が詠まれているのが特徴であろう。一首目は、理学部という囲いが当時の栗木の閉塞

感を表し、その外にいる白衣姿の人達がテニスをしている姿が伸びやかで楽しそうな印象を表し、対比を成している。二首目は「物理を学ぶ人は優しい」と作者が「君」に言っており、甘い恋の印象を与えるが、それだけではないようである。栗木によると、理学部の授業であった一、二年生の化学実験にはまったくついていけず、お荷物の方と組みたがる人はいなかった。そのため、大学院生、ドクターコースの若い男子学生と組み、素直な栗木の態度に気をよくした彼らに全部やってもらった。やってもらうから、成績はそんなに悪くないが、精神的にはすごく惨めだった。さらに、この実験での体験を通し、世の中のずるい生き方を学んでしまったような気もしたと述べている。^③このように、「優しい」ことに対する自分の甘えと罪悪感が表れている一首だと言えよう。

同誌八月号（昭和五十年）では、COSMOS 集の中に初めて小題を付して出詠している。^④

負しき自己
栗木京子 京都

気の弱く模糊と笑ひて過しし日寢床に入りて大き噓す

横伏せば足裏温き春にして今宵は夢を見ず眠りたき

キャンパスに夜更けて立てる看板のそだけ著く雨降りつけぬ

もみ合ひてデモ行進する学生ら生生しきもの投げあふごとし

風渡る林に君と居るときも貧しき自己に震へてゐたり

二首目の「横伏せば足裏温き春にして今宵は夢を見ず眠りたき」以外は歌集には収められていないが、ここで着目したいのは小題「負しき自己」である。五首目の「風渡る林に君と居るときも貧しき自己に震へてゐたり」でも「貧しき自己」と詠まれており、作者自身を表現する言葉であることは明らかである。先に述べた理学部の実験の体験からも、当時の栗木の心情がこれらの歌からも理解できる。また、栗木自身も著書『短歌を楽しむ』（岩波ジュニア新書）の中で次のように述べている。^⑤

表現することによって私も救われたい、とそのとき痛切に思いました。二十歳の頃、私は自分がとても嫌いで

したが、情けない自分ともう一度ちゃんと向き合ってみたい、と心のどこかで願っていたに違いありません。堰を切ったように言葉が溢れてきて見様見真似で一晩に十首も二十首も短歌を作りました。

秋風にみのりはじむる天と地のあはひに貧しき我うづくまる

疲れ果て屈めし体に内臓の音共鳴し哀しく呻く

栗木京子 『水惑星』

その折の作品です。「貧しき我うづくまる」「哀しく呻く」と、いったん自分を突き放して見つめ直すことで、ずいぶん気持ちが悪くなったことを覚えています。

栗木が例に挙げている「秋風にみのりはじむる天と地のあはひに貧しき我うづくまる」は栗木が第二一回角川短歌賞次席（昭和五十年八月）となった「二十歳の譜」の一首であり、小題「貧しき自己」と同時期に詠まれた歌である。つまり栗木が述べているように、当時の苦しい状況だった自己と向き合う中で作歌され、これらが当時の栗木にとつて「短歌」とは何か、を象徴するものであることが理解できよう。このように、「短歌」という自己表現、自己救済の手段と場を得て、栗木は理学部に残り学問を続けていく。だが、その後の歌からも迷い悩む姿が窺える。例えば、割り切れて何の懷疑も認めざる数字の世界時に恋しき⁶

では、理学という学問の竹を割ったような爽快さに対し、割り切れない自身の人生を比較しているようである。また、次の

物質に徹する強さ我になく生体学をとらむと決めし日

少しづつ遅くなり少しづつ疎まれ始む迷ひ小猫よ⁷

では、自己の限界も素直に認めながらも、自身を理学部という場所に迷い込んでしまった小猫に喩えてもいるのである。だが、今までのようにただの小猫ではなく、理学部という男社会の中で少しずつ生き抜く術を身につけてきた遅しさも表現している。それと同時に周りの評価にも敏感になっっている自身にも気づいているようである。さらに次

の二首も挙げたい。⁸⁾

バーナーに火ともしくるる人の手と食細き我の小さき手とあり

実験の合間に食ぶる夕食は男子学生らと同じもの取る

一首目では、「バーナーに火ともしくるる人」、恐らく男子学生と「食細き我」の「手」に注目している。「手」の違いにより、栗木は自分の弱さを見せつけられた気がするのではないか。だが、次の歌では、「食細き我」は、実験は苦手ではあるけれども、合間の食事は、男子学生と同じものを食べると詠む。それは今まで自身を「貧しき自己」「貧しき我」と称していた作者の成長であり、決意の表れでもあるようだ。

昭和五十年、「短歌」と出会い、賞を取った栗木は翌年も続けて会誌『コスモス』に投稿し、同時に『短歌』（角川書店）にも活躍の場を拡げていく。特に、毎号のように投稿している『コスモス』では、当時の栗木の複雑な感情が刻々と歌に詠まれているようだ。例えば、

タクシーの空車幾台走り過ぎ行方をもたぬわれの寂しさ⁹⁾

では、タクシーの「空車」表示が、これからどこに行けばいいのか悩んでいる青春期の作者の心情を表している。そのような自分を「寂しい」と表現しているのである。次号の小題「トルソーの静寂」¹⁰⁾では、

議論より君と歩くが楽しきと口には出せず資料広ぐる

トルソーの静寂を恋ふと言ふ君の傍^{かた}辺に生ある我の坐らな

雨後の陽が遍く躍る山に立ち我ら創世の男女とならむ

我もまた人に好かれぬ性^{さが}ありと畳を横に這ふ蜘蛛を見ぬ

丸まりし虫の死骸の占めぬたる極^まみの空に夜は流れたり

と連作になっており、「君」と詠んでいるので、「恋」の歌であろう。だが、嫌われ者のイメージが強い「蜘蛛」と自分を重ねていることから、作者の成就していない「片思い」を描出しているようである。続けて次の歌も詠まれている。

疲れ果て屈めし体に共鳴し内臓の音哀しく呻く

先に栗木が述べているが、この歌は当時の栗木の挫折を表しており、「短歌」と出会うことで克服できた感情でもある。また同号では次の歌も興味深いので挙げる。¹¹⁾

手に重き化学書借りて別れ来ぬ学ぶなと君は言ひてはくれず

この歌にも「君」が登場する。作者は好きな「君」に「学ぶな」と言つて欲しいのだろうか。それは理学という学問に溶け込めず苦しんでいる栗木の心情を理解してほしいという表れではないか。だが、「君」は言つてはくれず、作者は落胆するのであろう。素直な作者の心情が詠まれている一首であると言えよう。次では「月」と自分を重ねて詠んでいるようである。

自らは光らぬゆゑに小さく見ゆる月の細さを潔しと思ふ

敷石に揺るる家庭の明き灯を吐物のごとく避けて通りぬ

ある時は暗き面を見せてゐる月に真向ひ君と歩みぬ

特に一首目は「月」の特性である、自分で光を発せず太陽の反射で明るく光っているという点に注目しているのが興味深い。太陽によつて光ることを自覚しているから「月」は小さく見えて潔いという意味だろうか。だが、人間は、自分はどうか、と自問自答している作者が見えるようである。

栗木が「十代」をテーマに詠んだ歌二首がある。それぞれ発表時期は異なるが、次に挙げてみたい。

背後より来むものなべて甘かりし記憶をもちて十代終へぬ¹²⁾

悩み事数限りなく持ちてゐし我が十代よ甘やかにして¹³⁾

両首ともに「甘い」「十代」と詠まれている。二首ともに大学四年生の時の歌であり、栗木にとって「十代」とは「子供時代の終焉」を表現しているのではないか。卒業後は就職し、社会へと出ていく。だからこそ「十代」を「甘い」想い出の象徴として詠んだのではないであろうか。

以上、本論を展開する上で必要となる、作者の二十歳前後の心情についてまとめてみた。

三、「社会詠」の原点とその萌芽

前章を踏まえた上で、次に「社会詠」の原点を初期作品の中に探ってみよう。

現在の栗木短歌の特質の一つは「社会詠」⁽¹⁴⁾であるが、第一歌集『水惑星』では「社会詠」の存在は薄い。だが、出を調査すると、歌集には収められていない「社会詠」の原点ともいえるべき歌の存在に気付く。それらの歌から、現在の栗木短歌の特質である「社会詠」の原点は、大学時代にあるのではないかと考えられる。そこで、栗木短歌の「社会詠」を考察する一助として初期作品を小稿では分析してみたい。具体的には第一歌集『水惑星』から小題「二十歳の譜」「細き未来」「トルソーの静寂」「頬は太らず」「ガロアの生涯」「寂しき名の店」「芯かたき李」「夏」「銀杏降る頃」「冬となる街」「さよなら京都」、短歌結社「コスモス」の会誌、『短歌』（角川書店）を考察対象とする。これらはすべて栗木が学生時代に発表した作品である。

栗木が第二十一回角川短歌賞次席となり、注目を集めた「二十歳の譜」五十首と、同時期に短歌結社「コスモス」会誌に出詠された作品に「大学紛争」をテーマにしたものがある。例えば、

キャンパスに夜更けて立てる看板のそこだけ著く雨降りつけぬ

もみ合ひてデモ行進する学生ら生生しきもの投げあふごとし⁽¹⁵⁾

学友よ、と連呼する声キャンパスの午後の寡黙に奇異に響けり

一時は赤に染まるが青春とデモに加はる友の背が見ゆ

蔑まれ蔑み返す目もちて昨日の友より、アジビラを受く⁽¹⁶⁾

の五首である。「学友よ」、「蔑あざむまれ」の二首以外は、歌集には収められていない。これらの歌には「(立て)看板」、「デモ行進する学生ら」、共産主義、大学紛争を象徴とする「赤」、「アジビラ」が詠まれているのが特徴であろう。また、同年十一月『短歌』に発表された「細き未来」にも同じテーマの歌が出詠されている。

酒気帯びて党の批判をせし友も寂しと言ひて卓に突伏しぬ

酒に火照る腕をほどきて夜の中へ敵意もつごと別れゆきたり

力でも知でもあり得ぬ我ら酔ひ細き未来を直視し始む

酒の場を離りて覗く手鏡に逆像一枚懈たふく揺れ居り

赤青に花火果てにし暗闇に黙し得ぬ弱さ我らは持てり

友の死を話題にしつついつになく生き生き我ら菓子など食べぬ¹⁷

第一歌集『水惑星』にも小題「細き未来」は収められているが、「力でも」「友の死を」以外の歌は、収められていない。これらの歌にも「党」、共産主義を表す「赤」、青年を表す「青」など、やはり「大学紛争」を表する言葉が読まれている。その点からも、これらは大学生だった栗木が、京都大学内、周辺で見た光景、身近にある「社会」を詠んだものであろう。

では、栗木が在学していた昭和四十八年から昭和五十二年の京都大学はどのような状況だったのか。当時の様子を知る手がかりとして、『京都大学百年史 写真集』（京都大学出版）を次に引用したい。

京大の紛争は一九六九（昭和四十四）年一月十六日の増察問題をめぐる総長団交決裂後の学生部封鎖に始まる。封鎖は二十三日まで続き、その間学内では後の全共闘を中心とする封鎖支持派と五者を中心とした封鎖解除派による衝突が繰り返された。（中略）その後紛争は全学に広がり教養部や多くの学部で封鎖、授業休止が続いた。こうした状況下、奥田東総長は機動隊導入による紛争解決を決意し、九月二十一、二十二両日にわたって時計台

を含む全学の封鎖解除を行った。これを契機に学内は一応沈静化に向うが、一九七二（昭和四十七）年から数年間は、経済学部竹本助手の免職処分をめぐる学内で鋭い対立が続いた。¹⁸

傍線部にあるように、昭和五十二年に竹本助手の免職処分が決定されたと記してある点から、栗木が在学していた昭和五十年は、京都大学でも学内紛争中であった。だが、右の記述によると、昭和四十四年が学内紛争のピーク時であると思われることから、栗木が歌に詠んだ昭和五十年は、大学紛争も沈静化しつつあったと言えるだろう。しかし、京都大学の資料によると、栗木が入学した昭和四十八年四月一日の入学式は、学内情勢を見て混乱をおそれ、全学合同の入学宣誓式は中止された。京都大学で入学式が中止されたのは戦後初めてのことであったと記録にある。その後も学生が授業を妨害したことから、同年十一月七日には、前田総長、学生部長らを学生が追求し、大学の要請で機動隊が出動する騒ぎにもなった。このように、沈静化しつつあった京都大学に於ける大学紛争だが、栗木は入学当初より、キャンパスでそれらの光景を目にしていたのである。当時の栗木が「大学紛争」に関して、どのような立場でいたのか。残念ながら、インタビュー等で本人が語っているものは管見の限りない。だが次の三首、

キャンパスに夜更けて立てる看板のそだけ著く雨降りつけぬ
もみ合ひてデモ行進する学生ら生生しきもの投げあふごとし

学友よ、と連呼する声キャンパスの午後の寡黙に奇異に響けり

から、キャンパスで大学紛争を日常的に見ていたことは想像できるであろう。また次の

一時は赤に染まるが青春とデモに加はる友の背が見ゆ

蔑まれ蔑み返す目もちて昨日の友より、アジビラを受く

では、「友」という言葉が使われていることから、当時大学紛争に参加する身近な「友」の存在があったといえるであろう。このように、自らの日常を大学生だった栗木は歌に詠んでいる。

ここで着目したいのが「傍観者」としての栗木の存在である。栗木短歌における「社会詠」の数が増えたのは、第

五歌集『夏のうしろ』である。本歌集の「社会詠」テーマである世界各地の紛争やアメリカ同時多発テロ関連、北朝鮮の拉致問題などは、テレビ等のメディアの情報を基に詠まれていて。当時の栗木は安全な日本国内におり、問題の「外」にいる。栗木は「問題の外にいる立場から詠む社会詠」を得意としており、それは栗木短歌の特徴であるともいえるだろう。栗木は常に「傍観者」の立場から冷静に「現象の内」を分析し詠む。その原点といえる体験が、掲出歌にみられるように、京都大学在学中の「学内紛争」にあつたのではないだろうか。ここで「傍観者」の定義について述べる。『広辞苑』（岩波書店）では「そのことに関わらないで傍らでみている者」と定義している。しかし、栗木はこの定義通りの「傍観者」ではないことをここで一言記しておきたい。『夏のうしろ』で、佐田公子が栗木の「社会詠」について述べているので以下に引用したい。

栗木の社会詠は、日常のお茶の間から得た情報を、自己に引きつけてストリートには斬新な喩によつて詠んだものである。だからメディアから得られた生々しい事件事象が、栗木の歌となつて表出されたとき、その独自性に圧倒され、栗木と共にその事件事象を追体験することとなる。（中略）今更言うまでもないが、社会詠の難しさは、作者があくまでも当事者ではないことにある。しかし、栗木の場合は、メディアから日常的に得られる情報に真正面に向き合つていくことによつて、栗木と同様にメディアの情報を受けていた読者に、強烈なインパクトを与えることになる。そして、そうした栗木の自らの問い掛けは、混迷の時代を生きる読者にも自身の問題として深く刻み込まれ、人間の存在の深淵と悲哀を訴えかけることになつたのである。²⁰

傍線部のように、当事者ではない栗木はメディアからの情報を自己に引きつけて「社会詠」を作り、当事者ではない自分、「傍観者」の立場から詠んでいる。だが、定義通りの「傍観者」は問題について自己に問いかけることはないであろう。したがつて、その点からも栗木は定義通りの「傍観者」とはいえないのではないか。この特質は、作歌活動開始直後で応募した「二十歳の譜」²¹、同時期の作品にも断片的に表出しているといえるだろう。

ここで再び注目したいのは、第二章で言及した大学時代の挫折経験である。同級生は科学者を志す者ばかりで、湯川秀樹博士にあこがれて入学した栗木とは格段のレベル差があった。結果的に、栗木は落ちこぼれていき、劣等感と挫折感を味わうこととなる。そして、劣等感でいっぱいだった当時の栗木を救ったのが「短歌」であった。栗木は自らの想いや感情を一度言語化し、それを作品へと昇華させていったのである。大学時代、栗木は掲出歌の「友」のように「大学紛争」にも積極的に参加できず、入学した理学部の講義にもついていけず、居場所がなく孤独や将来への不安を常に感じていたと推測される。例えば、栗木は小題「細き未来」で次のような歌を詠んでいる。

何気なく手受けし聖書への誘ひのビラ捨て難く鞆にしまふ²²

小題「細き未来」という名が示すように、また本小題には大学紛争を詠んだ歌も収められていることから、当時の栗木の置かれている状況、つまり居場所なし、理解者の不在がわかるであろう。それらを求めていた栗木にとって、何気なくもらった聖書のビラをすぐ捨てることは難しいのである。もしかしたらいつか必要となるかもしれない、と鞆にしまふ栗木の揺れる心情が表出している歌であろう。

「短歌」と出会った栗木は大学生だった自身の日常を詠んでいき、そして自らが感じている疎外感や孤独感、劣等感といった実感を歌にして詠んでいく。これが、佐田が述べている「自己に引きつけて」詠む形式、さらに言うならば、「自分の心のうら（真実）」を詠む形式であり、これが後の栗木短歌における「社会詠」の原点となっていたのではないだろうか。次章では、その点について検証してみたい。

四、初期作品と『夏のうしろ』

次に初期作品と、「社会詠」が増え、高い評価を得た第五歌集『夏のうしろ』との共通点について考察してみたい。

先にも述べたように、大学在学時、構内で目にした「大学紛争」について栗木は数首詠んでいるが、それらの歌からは積極的に参加する様子は窺えない。常に「外」から距離をおいて、人々や自己の心情を詠んでいるのである。しかしながら、そこには、「外」の表面だけを見ない栗木の視点が明確に存在していることが認められる。例えば、その例として栗木のデビュー作で愛唱歌にもなっている「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」を挙げたい。この歌で、栗木は「君には一日という短い時間かもしれないが、私にとってはこの瞬間は一生なのだ」と詠んでいる。つまり、事実（表）は「一日」だが、私にとつての真実（裏）は「一生」なのである、と心の「うら＝真実」を詠じている。この視点は、「社会詠」が増えた第五歌集『夏のうしろ』にも確認できる。例えば、『夏のうしろ』のあとがきで、栗木は次のように述べている。

歌集名の『夏のうしろ』は、文字通り夏という季節のうしろであると同時に、青春のうしろ、繁栄のうしろ、戦いのうしろ、二十世紀のうしろでもあります。一つの現象が終わったあと、その次にやってくる新しさにすぐ目を向けがちですが、新しさを追う前に今しばし立ちどまって「うしろ」を丁寧に見つめてみることも大切なのではなからうか。そんな思いを込めて歌集名としました。⁽²⁴⁾

傍線部で「うしろ」と述べている通り、本歌集には表面ではなく、物事の「うしろ（裏）」に着目した歌が数首詠まれている。例えば、

洪水のごと蛍光灯明るすぎ真夜のコンビニに人もモノも見えず⁽²⁵⁾

好きだつた映画スター

ブロンドのトロイ・ドナヒュー逝き夏も行きわがアメリカに遠く手を振る
では、「青春のうしろ」、「繁栄のうしろ」を、次の

武器回収されたるのちは農機具もて殺し合ふなり隣人なれば

コソボ紛争⁽²⁷⁾

では、「戦いのうしろ」を、

汗まみれの夕日が森に沈む夏 負け戦負けつづけて死者たち⁽²⁸⁾

でも、「戦いのうしろ」、「夏のうしろ」を詠んでいると言えるであろう。また、「戦争の世紀」と呼ばれた「二十世紀」のうしろも表現している。さらに小題「夏のうしろ」では、

夏のうしろ、夕日のうしろ、悲しみのうしろにきつと天使ぬるらむ⁽²⁹⁾

と詠み、この歌では栗木の「うしろ（裏）」を見る視点、すなわち、心の「うら＝真実」を見る視点が明確に提示されていると言えるであろう。つまり、初期作品に既に表出していた現象のうら、物事の「うしろ」、表層ではなく深層に大事なもの（真実）があるという栗木の視点が、本歌集でも確実に継承されているということである。

五、おわりに

以上、栗木短歌の原点を考察し、そのゆくえを第五歌集『夏のうしろ』の作品群に確認した。最後に、考察の結果、明らかになつたところを整理しまとめてみたい。

まず、手順として、京都大学在学時の歌を初期作品と位置つけた上で分析、考察をした。具体的には、初出調査を通し、第一歌集『水惑星』には収められていない歌の存在に着目したところ、当時の栗木が抱えていた挫折感、劣等感、孤独感を作品に詠み、「コスモス」に毎号出詠していたことが判明した。それらの歌の変遷を辿ると、最初は挫折感、劣等感、孤独感が色濃く表現されているが、次第に作者自身の成長へと変化していく。それは二十歳で「短歌」と出会った、「貧しき自己」と向き合い、自身の「心の奥」を一人称で詠むことで、文学性の高い作品へと昇華させていく過程と重なる。ここで看過してならないのは、初期作品時代に栗木が直面していた挫折感、劣等感、孤独感が、栗木の「表層ではなく深層に大事なもの、真実がある」という視点を形成していくのに大事な役割をはたしていたという

ことであろう。

次に、前章を踏まえながら、栗木作品の特質とされる「社会詠」の原点とその萌芽を初期作品に探った。「二十歳の譜」を始め、京都大学在学中に詠んだ歌には、当時の栗木の身近にあった「大学紛争」がテーマのものがあつた。「短歌」と出会つた栗木は大学生だつた自身の日常を詠んでいき、そして自らが感じている疎外感や孤独感、劣等感といった実感を歌材としながら、心の深奥にあるものを素直に歌にし、詠んでいく。さらに「学内紛争」を通して、「傍観者」の立場で冷静に「現象の内側」を分析して詠んでいるという点に着目した。その結果、こうした体験を通して、栗木は「現象の表面ではなく内側」を詠む視点や表現技法を養つたのではないか、という結論に至つた。

最後に、これらを踏まえた上で、社会詠が数多く詠まれた第五歌集『夏のうしろ』の作品群に目を転じて考察を加えてみた。その結果、大学時代の初期作品群に認められた「表層ではなく深層に大事なもの、真実がある」という視点が、『夏のうしろ』では、「社会現象の表層ではなく深層に大事なもの、真実がある」という形に引き継がれていることが確認できた。したがつて、栗木短歌の原点である「表層ではなく深層に大事なもの、真実がある」という初期作品の視点は、第五歌集『夏のうしろ』の「社会詠」にも確実に継承されているといえよう。

註

- (1) 「インタビュー伊藤一彦×栗木京子」(『栗木京子』青磁社、平成二六年収載) 六九頁。
- (2) 『コスモス』(昭和五十年六月号) 一三六頁。
- (3) 註(1)に同じ。六八、六九頁。
- (4) 『コスモス』(昭和五十年八月号) 四八頁。
- (5) 栗木京子『短歌を楽しむ』(岩波ジュニア新書 岩波書店、平成一一年) 七四、七五頁。
- (6) 『コスモス』(昭和五十年九月号) 四八頁。

- (7) 『コスモス』(昭和五十年十月号) 一四六頁。
 (8) 『コスモス』(昭和五十年二月号) 一四七頁。
 (9) 『コスモス』(昭和五一年一月号) 一四九頁。
 (10) 『コスモス』(昭和五一年二月号) 四四頁。
 (11) 『コスモス』(昭和五一年二月号) 一三二頁。
 (12) 『コスモス』(昭和五一年六月号) 一五三頁。
 (13) 『コスモス』(昭和五二年一月号) 一五九頁。
 (14) 社会詠については、坂井修一が『岩波現代短歌辞典』(岩波書店、平成十一年)、「社会詠」の項で以下のようにまとめている。

近代以後、個人の感情生活や心理を掘り下げることが短歌の中心的テーマであったが、実社会への批判精神の欠落を危ぶむ声は古くからあった。狭義の社会詠は、インフレやストライキなど社会事象そのものを直接に歌ったもの。広義には、素材や詠風の具体性の有無によらず、社会を見たり批判したりする回路を示した作品を社会詠といつてよい。

- (15) 『コスモス』(昭和五十年八月号) 四八頁。
 (16) 『二十歳の譜』(『短歌』昭和五十年八月号) 三五頁。
 (17) 『短歌』(昭和五十年一月号) 一七六、一七七頁。
 (18) 『京都大学百年史 写真集』(京都大学後援会、平成九年) 一一〇頁。
 (19) 『京都大学百年史 総説編』(京都大学講演会、平成十年) 六五二頁を稿者が適宜まとめた。
 (20) 佐田公子『夏のうしろ』の発展——社会詠と日常詠の深化』(『栗木京子の作品世界』短歌新聞社、平成二〇年) 二八三、二八四頁。

(21) 例えば、註(4)で紹介した小題「貧しき自己」の「風渡る林に君と居るときも貧しき自己に震へてあたり」である。大学紛争の輪に入れないことに対して、自己と向き合い歌に詠んでいる。

(22) 註(17)に同じ。

(23) 註(16)に同じ。

(24) 栗木京子『夏のうしろ』（短歌研究社、平成一五年）一七七頁。

(25) 註(24)に同じ。 九頁。

(26) 註(24)に同じ。 六九頁。

(27) 註(24)に同じ。 八頁。

(28) 註(24)に同じ。 一二九頁。

(29) 註(24)に同じ。 一四四頁。